暑さに負けぬ熱戦 全国草サッカー男子の部開幕

第37回全国少年少女草サッカー大会（朝日新聞社など主催、第一三共ヘルスケア協賛）男子の部が17日、始まった。台風７号の影響などで中国１チームが出場を辞退し、国内外から127チームが参加。市内32会場で186試合が行われ、静岡県勢も好ゲームを見せた。

エスパルス

相手選手をかわして攻める水野颯太選手④（手前右）

３戦圧勝 ６年ぶりＶを

２０１７年大会以来の優勝を目指す清水エスパルスＵ―12清水は、初戦で北山小サッカークラブ（東京）に９―０で大勝すると、以降も、中野島フットボールクラブＪｒ（神奈川）に６―０、ＦＣ龍郷（鹿児島）に９―０で快勝した。

チームは14日まで１週間の韓国遠征を行った。「経験を積み、人間的に成長できた。この大会でさらに大きくなってほしい」と鈴木隼人監督(41)は話す。

「持ち味のフィジカルが韓国でも通用して自信になった」と計８得点の水野颯太選手（６年）。３戦連続ハットトリックで計10得点のＦＷ岩本勇人選手（６年）は「疲れは大丈夫。ゴールを決めるとどんどん調子が上がっていく」。攻守で活躍した主将の佐藤翼選手（６年）は「この調子で優勝したい」と力を込めた。（杉山圭子）

ＲＩＳＥ ＳＣ

第2試合で決勝の得点となるシュートを放つ川村悠翔選手

２位リーグ首位めざす

２０１９年の前回大会で静岡市勢最高の５位だったRISE SPORTS CLUB（同市清水区）は１位リーグ進出を果たせなかった。この日２試合で勝利し、迎えた同じく２勝のバディーＳＣ中和田（神奈川）との最終試合は、得失点差から「勝利」が次のステージへ進む絶対条件だった。

序盤からボールを支配し、優位にゲームを進めたが、放つシュートがことごとく相手ＧＫの正面に。ネットを揺らすことなく０―０でタイムアップ。ホイッスルを聞いた選手たちは、その場でうなだれた。

第２試合で決勝ゴールを決め、この日２得点をあげた川村悠翔選手（６年）は「最後の試合は攻め方に工夫が足りなかった」と反省を口にした。高岡士雄主将(６年)も「目標のベスト８には届かなかったけど、２位リーグのトップをめざす」と切り替えた。（中村純）

高部ＪＦＣ

ドリブル突破を図る村越杏那選手⑥（右）

首位通過へ意地見せた

高部ＪＦＣ（静岡市清水区）は２勝１分けで１次リーグを首位通過した。

１勝１分けで迎えた３試合目のコレーガサッカークラブ（東京）戦。１位には勝利が条件の試合で選手たちが意地を見せた。

前半、高部は左サイドから攻めて好機をつくるが、相手守備に阻まれた。後半、ゴール前のこぼれ球に右ＭＦの鬼頭駕衣選手（６年）が反応。左足を振り抜くと、相手ＧＫの手をはじいて、ゴールに吸い込まれた。ＧＫ工藤大海選手（６年）を中心に無失点で乗り切り、１―０で勝利した。

鬼頭選手は公式戦初得点で、「うれしかった。次も点を決めたい」。チームは昨年末の全日本Ｕ―12サッカー選手権大会で全国３位。昨年もメンバーだった主将の工藤選手は「みんなの気持ちを一つにして勝ち進みたい」と話した。（黒田壮吉）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。